

萩市の歴史的町並み

国選定重要伝統的建造物群保存地区



堀内地区



平安古地区



浜 崎



佐々並市

歴史

～萩の町並みこれまで～

1604 毛利輝元により
(慶長9) 萩城下町の縄張り開始

1606 佐々並市の現在地に
(慶長11) 貴布禰神社を遷座し町立て

1658 浜崎に住吉神社勧請
(万治元)

＜藩政期＞

1863 藩庁が山口へ移鎮
(文久3) (萩は城下町でなくなる)

1865 佐々並の戦いにより、
(慶応元) 佐々並市の一部が焼失

＜明治維新＞

1872 堀内の御成道が
(明治5) 10間から5間に

1876 平安古で小幡高政が
(明治9) 夏みかんの栽培を開始

1879 佐々並小学校が
(明治12) 御茶屋跡に移転

1924 堀内を橋本川から
(大正13) 菊ヶ浜を繋ぐ萩疎水が起工

1925 浜崎港の大改修により
(大正14) 石造の近代護岸に

1966 佐々並市で集中豪雨による
(昭和41) 大水害

萩の町並みの起源

現在に受け継がれる萩の町並みの起源は、江戸時代のはじめに求められます。関ヶ原の戦いに敗れた毛利輝元とその家臣たちが、阿武川河口の三角州に入り、築城を開始したのが慶長9年（1604）のことです。指月山の麓に構えた城を中心に三角州の地形を利用しながら町割りがなされました。このうち、堀内は、萩藩の重臣の屋敷や藩の役所が集まる旧三の丸として造られ、平安古は、萩城下の橋本川沿いに広がる重臣の下屋敷や中級の武家屋敷として造られ、浜崎は、日本海に突き出た萩藩の港町として整えられます。同じ頃、佐々並市は、瀬戸内側から萩城下町に至る萩往還の宿場町として町立てされました。



萩城下町絵図



防長地下上申附村絵図 佐々並村
(山口県文書館所蔵)

萩の町並みの変容

萩城下町は、毛利家の安定した藩政のもと、美しい町並みとその上に展開する豊かな都市文化が育まれました。しかし、文久3年（1863）に藩庁が山口に移り、城下町の機能を失った萩はやがて明治を迎える中で大きく変容を遂げることになります。主を失った堀内や平安古の武家屋敷は解体されましたが、その広大な跡地は、士族救済のために始まった夏みかん栽培の適地として再生し、その風除けとして維持された土堀とともに「土堀と夏みかん」の風景を造り出しました。また、町人地は近代の萩の中心として生き延び、中でも浜崎は豊かな日本海の魚を利用した水産加工物の生産拠点として大いに繁栄しました。一方、近代を迎えた佐々並市は、宿場町としての役割を終えたものの、佐々並川沿いの豊かな農村集落として、また周囲の在郷の中心の町場として栄えました。



昭和中期の夏みかん収穫の様子 (角川政治撮影)



土堀と夏みかんの続く堀内の町並み (角川政治撮影)



昭和中期の浜崎本町の町並み (角川政治撮影)



昭和初期の佐々並市の町並み

未来

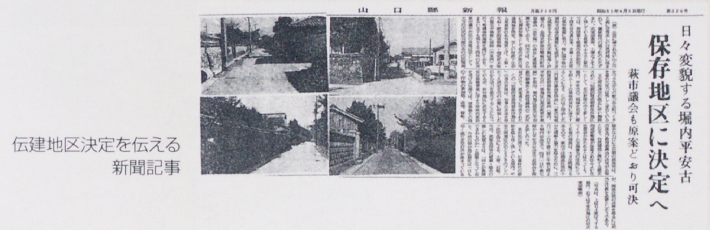
～萩の町並み保存のこれから～

萩の町並み保存のはじまり

萩は早くから歴史観光に取り組み、戦前には既に維新の志士達の顕彰や史跡観光の博覧会の開催など行っていました。一方、町並みの価値と魅力に気付いたのは戦後になってからです。高度成長期を迎えた日本では、日本の原風景を求める旅行が盛んとなりました。その中で萩の「土堀と夏みかん」の風景は、女性誌などにも取り上げられたこともあり、多くの人々が萩の町並みを求めて押し寄せました。しかし、その反動による開発で、あちらこちらで土堀が崩される事態となりました。このままでは、萩の町並みは失われると危機感をもった私たちの先達は、昭和47年（1972）に萩市歴史的景観保存条例を制定し、萩市独自の町並み保存に乗り出しました。

全国最初の伝建地区に (堀内・平安古)

ちょうど同じ頃、高山や金沢、倉敷などでも萩と同じような取り組みが始まり、この動きを受けて昭和50年（1975）に文化財保護法の改正により創設されたのが伝統的建造物群保存地区（伝建地区）制度です。そして、昭和51年（1976）に堀内と平安古の2地区が他の5地区とともに全国で最初の国の重要伝建地区に選定されました。両地区では、土堀や長屋門などの保存修理が行われ、この積み重ねにより現在に町並みが受け継がれています。



新たな伝建地区とまちづくり (浜崎・佐々並市)

また、平成13年（2001）には港町の浜崎が、平成23年（2011）には宿場町の佐々並市が新たに重要伝建地区の選定を受けました。この選定を後押ししたのは、浜崎の「浜崎しっちゃん会」や佐々並市の「萩往還佐々並どうしてやろう会」などの地区住民有志による町並み保存の取組みです。これらの地区の修理の対象となる民家は個人の住宅でもあることから、住み続けるためのまちづくりが町並み保存と一体となって取り組まれています。



佐々並市を出発する萩往還ウォークの様子



JR (旧国鉄) のディスカバー・ジャパン
キャンペーンのポスターに写る萩の土堀



新幹線新大阪～岡山開通時 (昭和47年) の
ポスターに写る平安古鍵曲の土堀



浜崎伝建おたから博物館の様子

萩の歴史まちづくりへ (萩まちじゅう博物館)

萩では、こうした伝建地区の歴史的景観保存の経験をいかし、早い時期から景観まちづくりにも取り組み、景観法が制定された後はいち早く萩市景観計画や屋外広告物に関する条例などを整備し、萩全体の美しい景観の保全と形成に取り組んできました。また、地域にある文化遺産を拾い出し、これらが点在する町そのものをひとつの博物館と見立てたまちづくり活動である「萩まちじゅう博物館」に取り組み、萩の町並みを未来へ受け継ぐまちづくりを実践しています。さらに近年では、萩市歴史的風致維持向上計画を策定し、萩にしかない文化遺産をいかした歴史まちづくりを通じて、この町並みを未来へと伝えていく取組みを進めています。

1972 萩市歴史的景観保存
(昭和47) 条例策定

＜伝統的建造物群保存
地区制度創設＞

1976 堀内と平安古
(昭和51) 国の重要伝統的建造物群
保存地区に選定

1977 堀内伝建地区拡大
(昭和52)

1989 「萩往還」国の史跡に指定
(平成元)

1990 萩市都市景観条例制定
(平成2)

1993 平安古伝建地区拡大
(平成5)

2001 浜崎
(平成13) 国の重要伝統的建造物群
保存地区に選定

2004 萩博物館・
(平成16) 萩まちじゅう博物館開館
(萩開府400年)

＜景観法制定＞

2007 萩市景観計画策定
(平成19)

2008 萩市屋外広告物等に
(平成20) 関する条例制定

＜歴史まちづくり法
(地域の歴史的風致の維持
向上に関する法律)制定＞

2009 萩市歴史的風致維持
(平成21) 向上計画を国が認定

2011 佐々並市
(平成23) 国の重要伝統的建造物群
保存地区に選定

・
・
・

※本冊子の所蔵先の特記のない図・
写真は萩博物館又は萩市所蔵

武家町 伝統的建造物群保存地区

堀内地区

～萩藩重臣の屋敷跡に残る数多くの土堀・石積み～

保存地区は、かつての萩城三の丸の大部分にあたり、外堀の内側にあることから「堀内」と呼ばれました。城下の町人地との間は外堀と土塁で画され、北の総門、中の総門、平安古の総門からしか出入りができませんでした。

築城以来、主に藩の諸役所（御蔵元・御木屋など）や毛利一門、永代家老、寄組等の重臣の屋敷が置かれ、萩藩の藩政を支える重要な武家地でした。永代家老の益田家（一万二千石）を筆頭に、正面に長屋門を構え、その周囲を物見矢倉や土堀で囲われた広大な屋敷の中に、庭園を伴った主屋や書院、土蔵が整然と配置されました。

ところが、幕末に藩庁が山口に移され、重臣達もこれに従ったことから、屋敷内部の主屋や書院、土蔵の大半は解体されました。一方で、主を失ったこの広大な屋敷跡は、緑を失った旧藩土により、近代の萩の経済を支える一大産業となった夏みかん栽培の適地として開墾されました。

この時、夏みかんの木を風から守るために屋敷周辺の土堀がそのまま転用され、これに加え建物の基礎石や庭石を用いて新たな石積みが築かれました。また、敷地周囲にあった長屋門や長屋の一部は、農家の住宅や作業小屋として利用されました。こうして、広大な重臣の武家屋敷跡を取り囲む土堀や石積み、長屋門等の背後に夏みかん畑が広がる独特の景観がつくりだされました。

その後、河畔を中心に腕木門と生垣に囲われた瀟洒な住宅が建てられるようになりますが、戦後も長く夏みかん畑は維持され、緑豊かな景観は安定して受け継がれてきました。

このように、藩政期の重臣屋敷の地割を取り囲む土堀や石積み、物見矢倉や長屋門などの伝統的建造物に加え、毛利家墓所のある天樹院や藩校明倫館跡などが保存され、これらと一体をなす夏みかんや生垣と共に、堀内の歴史的経緯が重層的に反映された独特の歴史的風致を今に伝えています。



所在地／萩市大字堀内字堀内及び字堀内村の一部
面積／約55.0ヘクタール
選定年月日／昭和51年9月4日(範囲拡大 昭和53年5月31日)
選定基準／(2)伝統的建造物群及び地割がよく旧態を保持しているもの

伝統的建造物／(建造物) 45件
(工作物) 267件
環境物件／140件
平成27年4月1日現在



口羽家住宅 (国指定重要文化財) [MAP ①]

口羽家は萩藩の寄組のひとつでした。橋本川河畔の敷地内には、江戸時代後期建築の主屋とそれより古い建築とされる長屋門が一般公開(有料)されています。



旧梨羽家書院 (県指定有形文化財) [MAP ②]

梨羽家は萩藩の大組に属していました。土堀の奥には、かつての屋敷の一部であった式台玄関を備えた書院と庭園が一般公開(無料、外観のみ)されています。



天樹院墓所 [MAP ③]

萩藩初代藩主である毛利輝元の墓である五輪塔がひっそりと立っています。国指定史跡萩藩主毛利家墓所(この他に大照院墓所・東光寺墓所・香山寺墓所(山口市))のひとつ。



(堀内) 鍵曲 [MAP ④]

二か所で鍵状に折れ曲がった通りです。土堀に囲まれ、見通しが利かないため独特の雰囲気があり、ロケや撮影などにもよく登場します。平安古にも同様のものがあります。



外堀 (国指定史跡萩城跡の一部) [MAP ⑤]

三の丸と城下を画する堀。幕末期の八間幅の堀や土塁の一部、かつて三つの総門のひとつであった北の総門が復元されています。



旧益田家物見矢倉 [MAP ⑥]

益田家は、萩藩の永代家老を務める重臣でした。江戸時代は前面に広大な馬場が広がり、これを見張るように建っています。

武家屋敷の顔 長屋門

堀内を歩くと多様な形式の土堀や石積みの間に長屋門がいくつか遺されています。武家屋敷の顔とも言える長屋門は、屋根を入母屋造りとし、軒天井を張り、本瓦を葺いた豪壮なものが多く見られます。通りに面しては、出入口を除いて白漆喰を塗り込め、腰には海鼠壁や木割の太い押縁を付けた下見板を張り、小さな開口部にも出格子が設けられ、極めて重厚かつ閉鎖的な顔を見せています。一方で、出入口を通り内側から見ると、棧瓦葺きの下屋庇の下に縁側を設け、間口一杯の広い開口部には障子戸を引き通した民家の庭先のような開放的な造りとなっています。外側では武家の体面、内側では日々の生活という両面から長屋門をご覧ください。



旧周布家長屋門(市指定有形文化財) [MAP ⑦]



旧児玉家長屋門 [MAP ⑧]



旧二宮家長屋門 [MAP ⑨]

土堀・石垣が語る 堀内の歴史

現在に遺されている土堀や石積みは、すべてが江戸時代に築かれたわけではありません。屋根の形式や土の壁面の積み方には違いがあり、石積みには、時代や家格、屋敷の表裏などによって石材や組み方、仕上げの方法にいろいろなタイプがあります。また、石積みの多くは、近代に入って夏みかん畑の風除けとして農夫によって築かれたのですが、その石材は畑である屋敷跡から掘り出した建物の基礎石や庭園の庭石などが転用されています。また、多くの場合は、基礎部分は、かつての長屋門や土堀の基礎がそのまま使われています。



山石の基礎を用いた本瓦葺き土堀



下段が江戸、上段が明治以降の石積み



下段が江戸、中段が明治以降の石積み、その上に昭和中期の土堀と屋根

武家町 伝統的建造物群保存地区

ひやこ 平安古地区

所在地／萩市大字平安古町字平安古、大字河添字河添の一部
面積／約4.0ヘクタール
選定年月日／昭和51年9月4日(範囲拡大 平成5年12月8日)
選定基準／(2)伝統的建造物群及び地割がよく旧態を保持しているもの

伝統的建造物／(建造物)11件
(工作物)39件
環境物件／16件
平成27年4月1日現在

～鍵曲土堀の背後に広がる水辺の屋敷跡～

保存地区は、萩城下町の西側を流れる橋本川沿いに広がりがつての武家屋敷の密集する地域の中心部です。本丸などのあった城内からは少し離れているものの、川に面した美しい景観を求めて藩の重臣の下屋敷などが構えられていました。

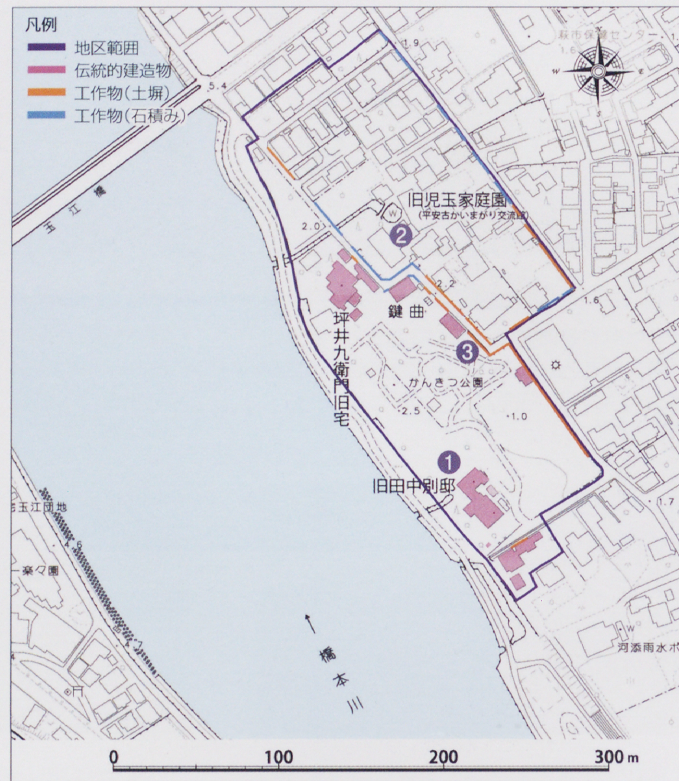
地区の中心を貫く通りは、途中で二度、鍵状に折れ曲がり、その両側を土堀で囲まれているため見通しが利かず、通称「鍵曲」と呼ばれ、市民に親しまれています。

また、橋本川河口のこの一帯は、古くから景勝地として認識されていたようで、江戸時代の絵図などにも描かれています。地区内には、この景観を借景に自らの屋敷に川の水を取り入れた池泉式庭園の一部や、庭園から直接に舟で川に出入りするための「舟入り」が遺されています。

しかし、堀内地区と同様に、幕末に藩庁が山口に移されたことを契機にこれらの下屋敷も維持できなくなり、一帯は広大な屋敷跡と祿を失った武家の家臣たちが残されました。この状況を解決するため、萩藩士であった小幡高政が、自らの屋敷内(旧毛利筑前守下屋敷)において夏みかんの商品栽培を試みて成功しました。その後、夏みかん栽培は、堀内地区の屋敷跡などにも広がり、近代の萩を支える一大産業にまで発展し、「土堀と夏みかん」の景観が生み出されました。

夏みかんの商品栽培発祥の地とも言えるこの屋敷跡は、その後、萩出身で陸軍大臣などを歴任し、昭和初期の内閣総理大臣となった田中義一が取得し、萩の別邸として整備し、萩での憩いの時間を楽しんだようです。

このように、水辺に開かれた地の利をいかし、江戸時代に



は重臣達の下屋敷などが置かれ、その後も夏みかん畑に転用されながらも、この水辺空間が現在にまで受け継がれ、鍵曲を中心に遺されている土堀や長屋門、主屋などの貴重な伝統的建造物と、それらと一体をなす庭園や松の巨木などが豊かな歴史的風致を保っています。



旧田中別邸

【MAP①】

藩政期に藩主の一門である毛利筑前守の下屋敷があった場所で、広大な敷地内には、かつて屋敷の一部である主屋の外、昭和2年に田中義一が建てた別棟(五松閣)や土蔵、表門、長屋等が建ち並んでいます。一般公開(有料)



旧児玉家庭園 (平安古かいまがり交流館) 【MAP②】

萩藩寄組の児玉三郎右衛門の屋敷地にあたり、当時の庭園内の池が残ります。橋本川から水を引き入れる水路と、笠山石の護岸と舟付場や石橋等、舟入りのある池泉式庭園の形式を今に伝えています。一般公開(無料)



(平安古) 鍵曲 【MAP③】

通りを直角に曲げて見通しを妨げることで、敵の侵入に対して備えたとも伝えられています。道沿いの土堀は中途り仕上げで堀内の鍵曲とは雰囲気異なり、堀越しに見える夏みかんが萩ならではの景観を作り出しています。

武家屋敷から夏みかん畑へ ～平安古からはじまった萩の夏みかん栽培～

江戸時代後期の様子を描いた萩城下町絵図には、武家の名前が記された大きな屋敷が並んでいます。名前の頭の方が屋敷の表側にあたります。

各屋敷は、この表に長屋門を構え、周囲は土堀で囲み、その中に主屋や土蔵、書院などの建物が建ち並んでいました。

幕末に藩庁が山口に移転すると、萩には主人を失った広大な屋敷跡と祿を失った士族が残されました。

この士族の救済のため、萩藩士で政府の要職も務めた小幡高政は、萩に戻り「耐久社」という組織を立ち上げ、毛利筑前守下屋敷跡の広大な土地を利用して、夏みかんの商品栽培に着手しました。当時は貴重であった夏みかんは、関西を中心に高値で取引され、武家屋敷跡を中心に萩一帯に夏みかん畑が広がり、近代萩の経済を支える一大産業にまで発展しました。

昭和中期の都市計画図をみても一面が果樹園のマークで埋め尽くされていることが窺えます。

このとき、武家屋敷跡の周囲に残された土堀が、夏みかんの風除けとして維持され、土堀の失われた部分には屋敷内の建物の基礎石や庭石を積み上げた石積みが築かれました。こうして生まれた「土堀と夏みかん」は、萩の町並みを代表する景観として、全国に知れ渡るようになりました。



絵図に描かれた平安古 (幕末期)



都市計画図に描かれた夏みかん畑と土堀 (昭和中期)



萩の夏みかんの商標ラベル

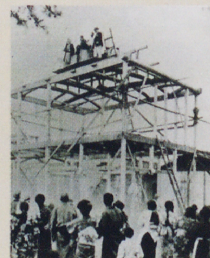


旧田中別邸敷地内に建つ「橙園之記」碑

「水辺」を活かした建築と庭園 ～五松閣と池泉式庭園～

橋本川沿いの堀内から平安古伝建地区の河畔は、江戸時代から水辺の景勝地として愛でられ、旧児玉家屋敷に遺されている舟入りのある庭園などにもその名残が見られます。

毛利筑前守の下屋敷は、小幡高政を経て、萩市呉服町出身で、第27代内閣総理大臣となった田中義一の別邸となります。彼は、ここに橋本川の景観を楽しむための二階座敷を備えた「五松閣」を築くとともに、屋敷内の舟入り庭園から橋本川に繰り出し、舟遊びに興じ、萩でのひと時を楽しんだようです。今では、萩八景遊覧船から同じ景観を楽しむことができます。



五松閣 棟上げの様子



舟遊びに興じる田中義一

伝統的建造物群保存地区に関する基礎知識

伝建地区とは

- 日本の町並み保存を進める制度として、昭和50年の文化財保護制度の改正によって誕生しました。
- 市町村が伝統的建造物群保存地区を設定し、これを国が選定したものが重要伝統的建造物群保存地区となります。
- 萩の4地区を含め、全国に百を超える伝建地区が存在し、各地域の歴史まちづくりの中心となっています。

伝建地区になると

- 住宅の改修など外観の現状を変更する行為は許可制となります。
- 地区内の土堀や民家など保存すべき物件は伝統的建造物として保存を図ります。
- 伝統的建造物の保存修理にあたっては、補助金の交付や技術支援、税制優遇などがあります。

写真上段：修理修景前
写真下段：修理修景後



伝建地区内の修理と修景

伝建地区の町並みには、たくさんの民家があり、たくさんの人たちの生活があります。ひとつひとつの民家の外観が町並みを構成することから、それらの調和を図り、民家の内部については、生活に合わせて自由にリフォームができます。

町並みを構成する伝統的建造物については、文化財として外観とこれに関係する構体の修理を実施し、この機会に昔の外観に復し、末永く保存を図ります。伝統的建造物以外の建物の新築、増改築については、外観を周囲の町並みと調和するための改修(これを「修景」と言います。)を行うようにします。

これらの行為については、それぞれの地区ごとに定められた保存計画に沿って実施され、経費の一定割合が補助金として交付されます。

毎年、少しずつ進められる修理や修景により、未来に向けて町並みが輝きを取り戻していきます。

港町 浜崎

伝統的建造物群保存地区

～海運、水産加工で繁栄した、萩の海の玄関口～

所在地／萩市大字浜崎町字浜崎町、大字東浜崎町字菊ヶ浜・字浜崎浦、大字浜崎新町字浜崎新町、大字熊谷町字熊谷町の各一部
面積／約10.3ヘクタール
選定年月日／平成13年11月14日
選定基準／(2)伝統的建造物群及び地割がよく旧態を保持しているもの

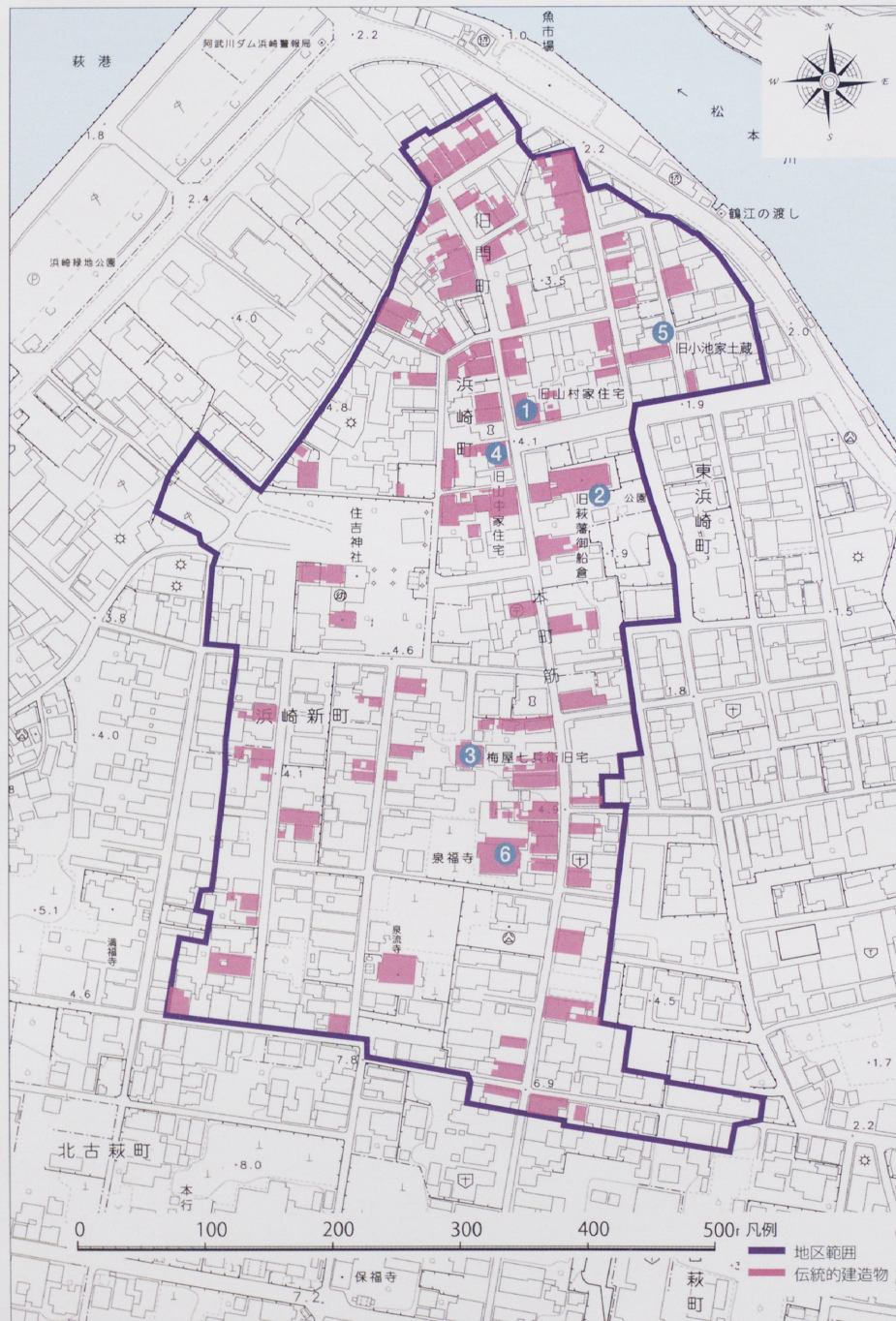
伝統的建造物／(建造物)128件
(工作物) 57件
環境物件／16件
平成27年4月1日現在

保存地区は、三角州の北東に突き出した砂州の東側、松本川河口に広がる萩城下町の港町として繁栄しました。町並みの中軸をなす本町筋は、この尾根に沿って伸び、その西側に本町より遅れて成立した浜崎新町、北端にはかつて藩の蔵屋敷が建っていたことから門門で出入りを制限していた門町などから構成されていました。

浜崎は、萩城下の港町であることから萩藩の領地を治める勘場である「浜崎宰判」が町並みの中央部川沿いに置かれ、萩の沿岸部に点在する七つの浦と萩沖の六つの島を治める萩藩の海の一大拠点でした。この浜崎宰判は、藩の役所の建物の他に、御座船など藩の軍船を収納する「御船倉」と呼ばれる屋根付の収納庫が並び建っていました。一方で、川沿いには城下町に荷揚げする物資や近隣の漁村から水揚げされる魚などを扱う港が設けられ、これらを取り扱う廻船問屋や魚問屋が軒を連ね、浜崎は大いに繁栄しました。近代に入っても、商船の定期航路が置かれ萩の物流拠点となりますが、大正期に鉄道が敷設され、徐々にその機能を失うものの、水揚げされる魚を加工した干物や蒲鉾などの水産加工業は発展し、現在にも受け継がれています。

町並みは、萩城下の町人地の町割りと同様に、通りに面して間口が狭く奥行きが深い敷地に、江戸時代から近代にかけて建てられた切妻造平入厨子二階建ての町家の主屋や土蔵が通りに沿って連続し、背面には庭園や茶室も遺される他、町並みの中心部には御船倉と対峙するように浜崎町人の信仰の中心である住吉神社の境内が広がっています。

このように、浜崎の町並みはその立地をいかし、萩藩の海を治める拠点と、萩城下町の物流と水産加工業を支える河港という二つの性格を帯びた港町として繁栄し、それによって築かれた町家が建ち並ぶ町並みと、そこを舞台に受け継がれてきた祭礼や水産加工業、生活文化が今に伝えられ、往時の繁栄が偲べれます。



旧山村家住宅 (浜崎まちなみ交流館) [MAP ①]

江戸時代後期の建築で、南北2棟の主屋の外、2棟の土蔵、離れが建ち並びます。京都や大阪の豪商の住居に見られる「表屋造り」の建築形式が見られます。一般公開(無料)



旧山中家住宅 (浜崎まちなみ交流館) [MAP ④]

主屋は昭和6年、奥の土蔵は江戸中期の建築で、浜崎特有の間口狭く奥行きが深い町家建築です。明治時代のチラシである「引き札」等の貴重なおたからを展示。一般公開(無料)



旧萩藩御船倉 (国指定史跡) [MAP ②]

藩主の御座船を格納する施設で、屋根付きの船倉として現存する全国唯一のもの。かつては同形のものが数棟建ち並んでいましたが、順次解体され、現在は1棟のみ残ります。コンサート会場等に活用されています。



旧小池家土蔵 (浜崎まちなみ交流館) [MAP ⑤]

1700年代末期の建築とみられる長大な土蔵。湿気を防ぐため床下に砂が充填されています。内部には、御船山車やのんた提灯など住吉祭りの祭礼に関連するものが展示されています。一般公開(無料)



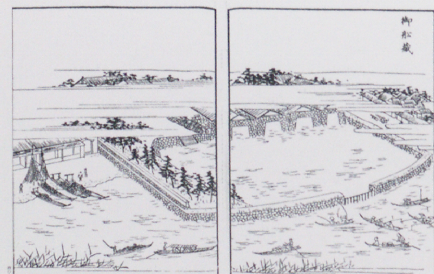
梅屋七兵衛旧宅 [MAP ③]

明治初期の建築で、通りから延びる長い通路の奥に広がる庭園に建っています。建築主の山本七兵衛(梅屋は屋号)は、幕末に萩藩の命を受け、外国から武器を調達することに尽力しました。一般公開(無料)



泉福寺 [MAP ⑥]

江戸時代初期に創建され、現在の建物は1700年代初期の建築とみられます。通りに面して建つ山門が特徴的。明治維新の精神的指導者、吉田松陰の養家である吉田家の菩提寺で、本堂には位牌が安置されています。



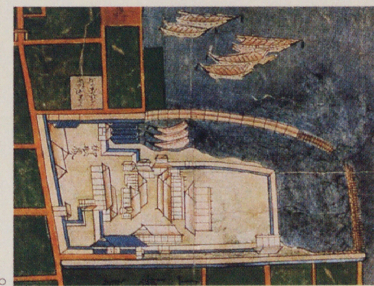
「八江萩名所図画」に描かれた御船倉

萩藩の海の拠点 浜崎宰判

萩藩は町奉行が治める城下町以外の領地は、それぞれの地域ごとに「宰判」と呼ばれる代官によって治められていました。浜崎町と浜崎新町

は、御船倉に置かれた浜崎宰判の管轄でした。浜崎宰判の管轄として、隣接の浜崎浦や対岸の鶴江浦をはじめ、沿岸の三見浦、玉江浦、小畑浦、越ヶ浜、大井浦の七浦と萩沖の羽島、肥島、大島、櫃島、尾島、相島の六島があり、萩沖の海を介して各地の浦と島を束ねるユニークな宰判でした。

絵図に描かれた浜崎宰判の勘場は、藩の軍船を収納する御船倉を中心に、建物が建ち並び、萩藩の海の拠点として重要な役割を果たしていた様子が伝わってきます。



絵図に描かれた浜崎宰判の勘場

浜崎の繁栄を支えた 河港と水産加工

浜崎は、萩藩の海の拠点であるとともに、城下町の港町として、物流や水産業の拠点でもありました。河口につくられた港から揚げられた物資を扱う各種の問屋が軒を連ね、浜崎の繁栄を支えました。また、萩沖の豊かな海から水揚げされる魚は、浜崎本町筋の魚問屋を介して、本町裏から浜崎新町一帯の加工場に運ばれ、いりこや干物、蒲鉾や竹輪などに加工され、近代以降も繁栄を続け、萩の特産物として現在に受け継がれています。

河口には今でも、水産加工の原料にする魚を水揚げする魚市場で朝早くセリが行われ、日本海に面した砂浜では、茹で上げたちりめんを天日干しする風景を見ることができます。



「八江萩名所図画」に描かれた「浜崎魚迫場」

宿場町 佐々並市

伝統的建造物群保存地区

佐々並市は、萩と瀬戸内側の重要な港が置かれていた三田尻（現防府市）を結ぶ萩往還の宿場町です。

保存地区は、萩往還を中軸にこの沿線に広がる棚田を含み、町並みは佐々並川の南側を並行に延びた西端で北に折れ、川を渡り、山際まで続く範囲です。

江戸時代の初めに萩往還が整備される際、それまでの集落を再編して町立てされました。藩主の休泊施設である「御茶屋」が設置されたほか、藩主に随行した重臣の宿泊の役を果たす「御客屋」と呼ばれる大規模な二つの屋敷が配置され、その他の家臣は各民家に分宿していたようです。

また、町の中心部には、往還を行き来する人馬の取次などをする目代所が置かれ、高札場が立てられ、各種の商売を営む民家が軒を連ねていました。佐々並川を北へ渡ると、宿駅を行き来する馬の供給をする役割を担う民家が数多くありました。このように、場所により役割を分担して宿駅の機能を果たしていましたが、日常は農村集落として存在していました。

萩往還の町並みの背後には水田が、往還沿いの山麓には自然石を野面積した美しい棚田が展開し、田へと繋がる水路は縦横に張り巡らされ、周囲の山々は季節ごとの彩りを醸し出してきました。

町並みを構成する民家は、江戸時代にはほとんどが茅葺きでしたが、幕末から近代にかけて石州赤瓦葺きが急速に普及し、現在は両方の屋根形式が見られます。間取りにおいても商売をするミセを持ち、商品を取納する土蔵を備える商家タイプと、広い土間を持ち、

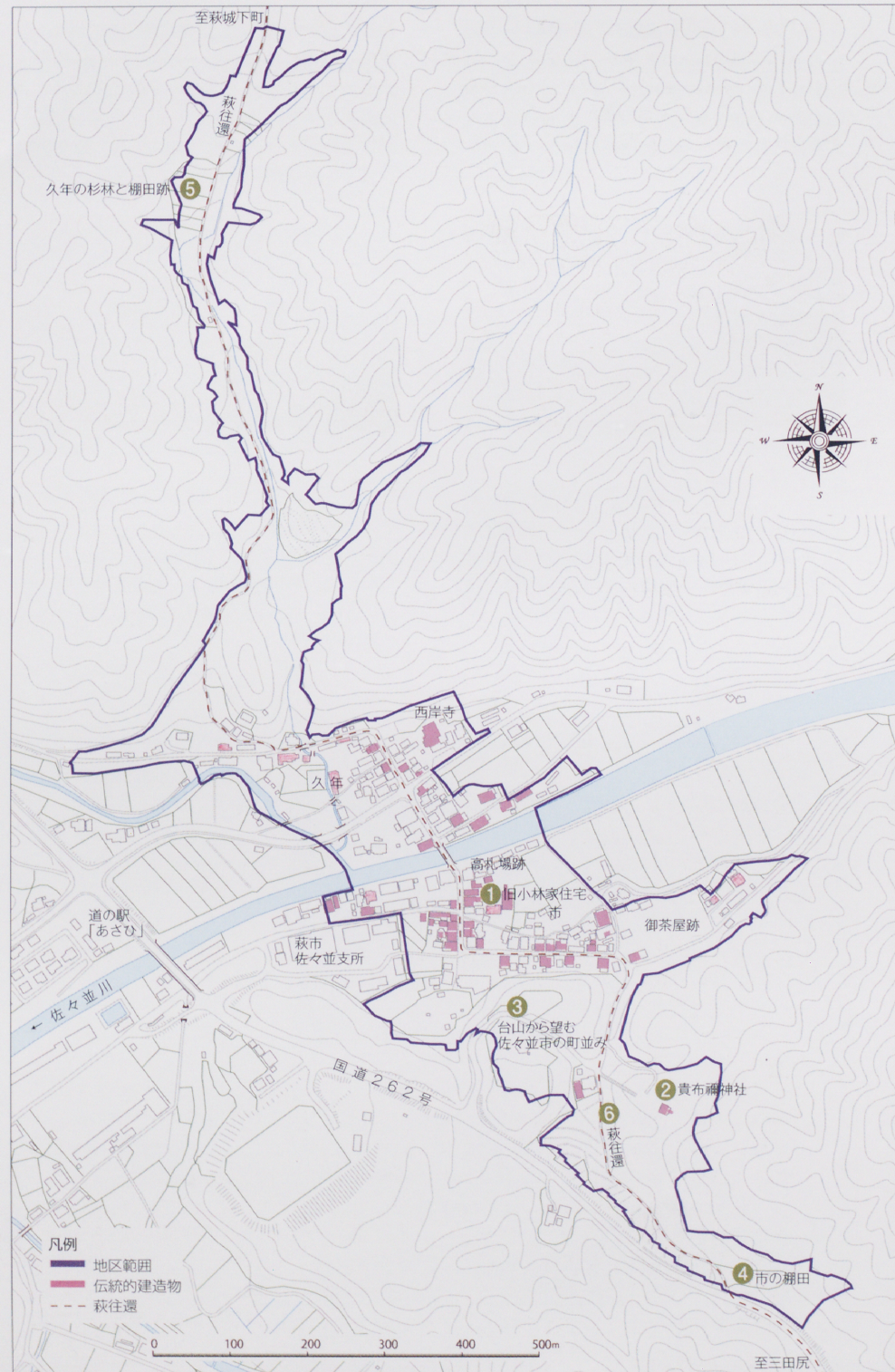


「行程記」に描かれた佐々並市（山口県文書館所蔵）

家畜や農機具を取納する納屋を備える農家タイプが現在でも混在しており、佐々並市独自の町並みを形作っています。

このように、佐々並市の町並みは、江戸時代の初めに萩往還の整備に伴い町立てされ、萩藩の宿駅として重要な

役割を果たす一方で、時代を通じて豊かな農村集落として存在し、茅葺きや石州赤瓦葺き民家と、佐々並川に注ぐ水系に支えられた水田や棚田、周囲の山々が一体となった美しい佇まいを今に伝えています。



所在地／萩市大字佐々並字久年市、字山田、字上市、字中市及び字沖市の全域並びに字前千持、字前千持東側、字東千持、字新道ヶ坪、字新田、字犬鳴、字竹ノ下、字財徳、字大野、字中溝、字台山、字道祖ノ元、字宮ノ坪、字東板橋の各一部
面積／約20.8ヘクタール 選定年月日／平成23年6月20日
選定基準／(2)伝統的建造物群及び地割がよく旧態を保持しているもの

伝統的建造物／(建造物) 59件
(工作物) 152件
環境物件／9件
平成27年4月1日現在



旧小林家住宅

【MAP①】

明治40年に隣地から移築された主屋と、離れ、土蔵からなり、当地は江戸時代、人や荷物の送り役に必要な人馬の差配や経費の出納事務を行う「目代所」がありました。一般公開(無料)



市の棚田

【MAP④】

国道沿いの板橋坪から下る萩往還に沿い、貴布祢神社境内地の下方に広がる谷状の地形を利用して棚田が形成されました。何段にも築かれた石垣が美しい景観を見せています。



貴布祢神社

【MAP②】

かつては他所にありましたが、藩主の休息所である「御茶屋」を見下ろすという理由から、1606年に現在地へ遷座されました。本殿拝殿とも江戸時代後期の建築で、佐々並市の守り神として住民に敬われています。



久年の杉林と棚田跡

【MAP③】

久年集落から萩に向かう萩往還は千持坪まで上り坂となり、その間の道沿いに作られた棚田には戦後になって稲に代わり杉が植林され、夏場には訪れる人に程よい木陰を提供しています。かつての棚田の石垣が樹間から垣間見え趣深いものです。



台山から望む佐々並市の町並み

【MAP⑤】

佐々並市は、佐々並川を挟み南側の市集落と北側の久年集落で構成され、御茶屋の整備と同時期に町並みも一挙に成立したと見られます。市集落は宿泊、商業の機能、久年集落は輸送用の人馬供給機能を担っていました。



萩往還（国指定史跡）

【MAP⑥】

毛利氏の萩転封に伴い、参勤交代のため萩から三田尻まで整備され、萩藩内の最重要路に位置づけられました。また藩内物流の大動脈としても機能し、往還の宿駅機能のため佐々並市の町並みが形成されました。

石州赤瓦葺きと茅葺きの町並み

周囲の山々や水田の緑に赤瓦の町並みが映える佐々並市の町並みですが、江戸時代の絵図には大半の民家が茅葺きで描かれています。赤瓦は石州（現在の鳥根県西部）で江戸時代中頃から生産されるようになりました。良質の陶土を高温で焼き固め、これに來待石から得られる赤褐色の釉薬で瓦の表面をコーティングすることにより、雪の滑りがよく、凍結にも強く、萩地域には幕末から明治初期にかけて普及したようです。その後、建替えや屋根の葺替えの際に茅葺きから赤瓦葺きに取って代わるようになり、近代を通じて徐々に変容しながら、現在に見られる町並みが作り上げられました。

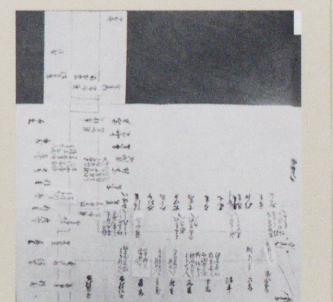


石州赤瓦葺きと茅葺きが入り交じる昭和初期の佐々並市

萩藩の宿場 御茶屋と御客屋

佐々並市は、萩往還を行き来する藩主らを受け入れるという重要な役を担っていました。藩主の休泊施設である御茶屋は、往還に面して長屋門、その背後には馬を繋ぐ馬建場が設けられ、その奥には、式台玄関を設け、御座敷を備えた主屋や土蔵が配される本格的な武家屋敷でした。一方、藩主に随行する重臣たちは、街の中ほどに位置し、町の有力者である井本家、木村家の屋敷に分かれて宿を取りました。このため、両家は、民家でありながらも、広い間口を持ち、式台玄関や座敷を備えた武家屋敷に準じた間取りを備えていました。その他の家臣は、周囲の民家に分宿したようで、その様子が宿割帳に記されています。

このように藩主を迎える日には、町全体がひとつの巨大な宿のように機能していました。



藩主に随行する家臣の宿割を記した土山家文書(山口県文書館所蔵)

萩市の伝統的建造物群保存地区の位置

図中に番号のある物件は、この冊子のそれぞれの伝建地区のページに解説があります。



交通アクセス

車をご利用の方

中国自動車道美祢東JCT経由、
「小郡萩道路（無料）」絵堂I.C.から約20分

飛行機をご利用の方

- 萩・石見空港
集合タクシーで約75分
(予約制 前日までに申込が必要)
- 山口宇部空港
●JR新山口駅までバスで約35分、
JR新山口駅からバスで約70分
●集合タクシーで約75分
(予約制 前日までに申込が必要)

- お問い合わせ
萩近鉄タクシー株
TEL (0838) 22-0924

新幹線をご利用の方

- JR新山口駅より
- スーパーはぎ号
(大河ドラマ館直行バス) (約60分)
- 防長バス (70分)
新山口駅～美祢市～萩バスセンター
- 中国JRバス (95分)
新山口駅～山口市～萩バスセンター

- お問い合わせ
防長交通株バスセンター案内所
TEL (0838) 22-3816
中国ジェイアールバス株山口支店
TEL (083) 922-2519



ハイウェイバスをご利用の方

- 東京⇄萩 (萩エクスプレス)
東京 (東京駅八重洲南口) 19:30 → 萩 (萩バスセンター) 10:04
東京 (東京駅日本橋口) 8:24 ← 萩 (萩バスセンター) 17:45
- 京都・大阪・神戸⇄萩 (カルスト号)
大阪 (あべの橋バスステーション) 22:30 → 萩 (萩バスセンター) 10:10
大阪 (あべの橋バスステーション) 7:05 ← 萩 (萩バスセンター) 19:30
- お問い合わせ
防長交通株バスセンター案内所 TEL (0838) 22-3816



発行: 萩市歴史まちづくり部文化財保護課

〒758-8555 山口県萩市江向510番地

TEL (0838) 25-3238

FAX (0838) 25-4011

e-mail bunkazai@city.hagi.lg.jp

萩市公式ホームページ <http://www.city.hagi.lg.jp/>